

幼稚園教育実習における課題への取り組みの一考察

Current Status and Issues of Students in Educational Training at Kindergarten

菜 原 桂 子*	梅 村 拓 未*	石 澤 優 子*
NAHARA Keiko	UMEMURA Takumi	ISHIZAWA Yuko

I. は じ め に

コロナ禍における教育実習も令和4年度において3回目を迎えたが、本学短期大学部の教育実習は、若干の変更や日程調整等を要したものの、現状に戻りつつある実施状況で無事終了することができた。基本日程を2年次5月中旬に設定し、実習訪問指導においても全道各地の実習園を含み、一部の地方園を除いては実習園を訪問して行うことができた。

実習生は、前年度の課題をふまえた実習指導の試みを始めとした事前準備に取り組み、教育実習を開始することができた。

本学の教育実習は、「教職に対する愛着や誇りを持ち、社会人として、また教師としての自覚のもと自立的に行動する教育実習生を育てる」ことを目指して、次の実習生像を設けている。

- (1) 教職に対する強い情熱を持ち意欲的に学ぶ実習生（使命感・責任感）
- (2) 教育の専門家として、確かな力量の獲得を目指す実習生（専門的知識・技能）
- (3) 豊かな人間性や社会性を身に付け、自ら判断し行動する実習生（人間性・社会性）

以上のことを念頭に置き、実習事前指導は教育実習講義Ⅰとして15コマ、教育実習講義Ⅱとして事前指導と事後指導に分けて15コマ講義を行っている。その実習生像は後に本学が育てる教師像につながっていくことを目的としている。本学が育てる教師像は「人間的魅力をはじめ人格的資質を身につけるとともに、確かな知識・技能と実践力を備え、自信と誇りを持って行動する教師」である。具体的には、以下に挙げる内容となる。

- (1) 園児と人間的にふれあい、保護者や地域社会と手をつなぐ教師（ふれあう教師）
- (2) 自ら研鑽に励み自己を高め、今日的保育の課題に対応できる教師（学び続ける教師）
- (3) 豊かな個性を持ち得意分野を生かして実践し、同僚と協力・連携できる教師（個性豊かな教師）

本稿は、菜原・梅村・石澤（2022）の「実習生による幼稚園教育実習における学生の現状と課題」において、学生が記述した実習報告書の内容と、各園が学生を評価する教育実習評価表の実習態度および指導能力（各6項目）について、各園の担当教諭が5段階で実習生の教育実習を評価している、教育実習評価表をそれぞれの項目について得点の平均値（標準偏差）を算

* 北翔大学短期大学部こども学科

出し、全体の傾向の掴みを手掛かりにし、分析の結果に対する結果とそれらに向けての改善を目指す取り組み内容は、主に低い得点を示したものに焦点を当てた。明らかにした分析結果は、課題として具体的に組み込み、その後、取り組みについての効果をテキストマイニング（QSR International, NVivo）を行い、ワードクラウドを出力して検証した。また、各園が学生を評価する教育実習評価表である教育実習評価表を用いて、主に実習態度および指導能力（各6項目）について、各園の担当教諭が5段階で実習生の教育実習を評価した内容を、それぞれの項目について得点の平均値（標準偏差）を算出し、全体の傾向を掴むこととし、今後の教育実習、教育実習事前・事後指導の向上を目指した。

Ⅱ. 教育実習の概要と課題に対する取り組み内容

Ⅱ－１ 教育実習概要

・実習の目的

- （１）幼稚園の教育の実際（現場）について、体験を通して総合的に学ぶことができる。
- （２）短期大学部で学んだ基礎的な理論や技能を、園児の成長・発達に合わせて有効に生かす実践的な態度を身につけることができる。
- （３）幼稚園の先生としての愛情や使命感を深め、自ら保育者としての資質や適性について自覚することができる。

・教育実習期間：令和4年5月16日（月）～6月3日（金）を基本として3週間（15日間）

・幼稚園教育実習対象学生：北翔大学短期大学部こども学科2年生・長期履修生79名

・教育実習園地域：札幌市…26園 江別市…4園 道内…39園 計…69園

・事前・事後指導関連教科：教育実習講義Ⅰ（1年次後学期15回）

教育実習講義Ⅱ（2年次前学期15回）

・事前・事後指導内容概要

1	「教育実習とは」「教育実習の目的と意義の理解」「教育実習で学ぶことについて」
2	「実習実施の条件（所定単位の修得・適格性・麻疹抗体反応・胸部X線等）と流れについて」
3	「実習の心構え」「基本的態度」
4	「指導案・日誌について」
5	「模擬保育」
6	事前訪問（オリエンテーション）指導
7	訪問指導担当教員による実習生指導
8	実習自己評価・振り返り・キャリアプランニング
9	実習園評価表による個人面指導
10	実習報告会（実習学年全体報告・短期大学部こども学科全体報告）

※上記を教育実習講義Ⅰ・教育実習講義Ⅱの授業内30回内で行う。

※こども学科全体報告会は保育実習（保育所・施設）も含め応用教育セミナーⅡ

（2年次）基礎教育セミナーⅡ（1年次）授業内合同実施

Ⅱ－２ 課題に対する取り組み内容

以上の全体的な概要の中で、分析の結果に対する結果とそれらに向けての改善を目指す取り組み内容については、以下に示す。

課題

- ①保育の指導方法・技術の向上 ②実習生の自主性・積極性の向上
- ③指導案の立案・記述について ④他科目との連携の強化
- ⑤正確なデータによる分析

取り組み 【 】内数字は課題達成を目指した活動に対する課題番号

1. 保育内容演習Ⅰでの実践【①・③・④】

保育内容演習Ⅰでは、本来近隣の子どもたちを学内に招待して学生たちが企画を行い子どものあそびの場を展開するものである。今年度はコロナの感染拡大防止の観点より子どもたちを招待せず、子どもたちが手作りのおもちゃで遊ぶことができるように授業の各回で手作りのおもちゃ作りに取り組み、「手作りおもちゃセット」にして札幌市内のこども園に寄贈した。手作りおもちゃは3歳から5歳の子どもたちも制作活動の中で作ることができる内容で、6種類用意し子どもが作ることも想定し、指導上の留意点など講義内で説明しながら取り組みを行った。実習の際、指導の仕方や指導案の立案に役立てるところをねらいの1つに置いた。

2. 保育内容の理解と方法Ⅳでの実践【①・②・③・④】

保育内容の理解と方法Ⅳは、言語表現に関する内容を行っている。子どもたちの前で自信を持って遊びやシアターを展開する事ができるように、保育教材を作るだけではなく、それらを実際に子どもたちの前でやることを想定して、一人ひとり発表する機会を設けて評価した。また、素話など、保育の実技に当たる内容も2種類追加し長期の休みに取り組む課題にあてた。

3. 保育内容表現での実践【①・②・④】

学生は人前に出ることに對し、緊張度が高い傾向が多い。このことは、各教員による実習訪問指導の報告書や実習指導を行う保育現場の指導者、実習事後指導の学生面談等で頻繁に上がる内容である。授業内で少しでも多く経験を積むことが重要であり、演習の授業に限らず、多くの科目でアクティブラーニングをはじめとした、学生の主体性を育む授業内容が創意工夫されている。保育内容表現においても、グループで意見を出し合い、皆で協力し合いながら制作して発表する活動を取り入れている。また、失敗から学ぶことの意義やチャレンジする意欲への働きかけなど、授業内の演習を通して振り返りや考察を行い継続した。

4. 指導案の指導内容の見直し【③】

指導案については、概要について理解を深めた後、活動の種類を変えて、立案・記述の経験を積むことが重要であると考え、教育実習講義Ⅰの段階から種類を増やし、添削などもさらに詳細に行うこととした。指導体制を強化するため、教育実習担当指導教員を1名増員し、学生が指導案を立案・記述する過程の中で個別の相談や指導を受けることができる体制にした。また、PCによる作成も検討し、実習園で許可済みの場合学生が選択できるように、準備を進めている。

5. 模擬保育の回数増加【①・②】

模擬保育は教育実習講義Ⅰの段階で2回、教育実習講義Ⅱの事前指導の段階で2回増やすようにした。グループの人数を6～8名で活動していたところを4～5名に減らし、指導教員1名増員により受け持ち人数を減らすことができたため、きめ細かく指導が行き届く体制を整えた。模擬保育の後には、グループ内で考察を行い、次に活かすことができるようにした。

6. 無記名アンケートの実施【⑤】

菜原・梅村・石澤（2022）の「実習生による幼稚園教育実習における学生の現状と課題」におけるテキストマイニングによる分析結果では、学生の実習成果に関わるデータから、おおむねの現状や課題を分析することができたものの、テキストデータとした「実習報告書」は記名式であった。実習の成果として得た記述内容については評価に関わらないことと、正直に記すことを促したが、記名式であることにより、正確なデータの分析には課題があることをふまえ、今回は無記名でアンケート調査を行うこととした。

7. 自己紹介作品の申し出【①・②・④】

保育内容の理解と方法Ⅳの授業課題で作成した実習で使用する自己紹介のための手作り教材を教育実習講義Ⅱで1グループ4～5人のグループ内で一人ずつ模擬保育として実践し、評価し合いながら考察する取り組みを行った。さらには実習生の主体性や積極性向上のため、実習事前訪問（オリエンテーション）の時に自ら申し出て子どもたちの前で展開させていただき考察することを課題として取り組むようにした。

Ⅲ. 方 法

Ⅲ－1 対象者

本稿では、2021年4月に入学して幼稚園教諭二種免許状の取得を希望し、幼稚園教育実習に関する授業および幼稚園での教育実習を履修した49名の学生（男子：2名、女子：47名）を対象とした。成績には一切関係ないこと、答えたくないことは答えなくてよいこと、調査への参加辞退が可能であることおよび個人名がわからない形でデータが収集されることを伝え、対象学生たちに了承を得た上で調査を実施した。

Ⅲ－２ 手続き

本調査は、実習生たちが教育実習の事前準備および教育実習を終えて感じたことや気づいたこと点についての振り返りから、今後の保育者養成に活かしていくことを目的としている。調査内容としては、対象学生たちに対して主に２つの点についてFormを用いて尋ねた。一つは、「教育実習を経験して、成果を感じた部分はどのようなことであったか」、二つは「教育実習を経験して、課題を感じた部分はどのようなことであったか」という点である。以上の点について、学生たちには自由に記述するように求めた。

対象学生たちによる教育実習の振り返りは、すべてテキストデータとし、語句のつながりおよび重要度を分析するためにテキストマイニング（QSR International, NVivo）を行い、ワードクラウドを出力した。対象学生たちの自由記述の中で頻出度が高い語句ほどワードクラウドの中で大きく中央に表示される。

Ⅳ. 結果と考察

教育実習を経験して、成果を感じたところについて、自由記述の内容をテキストマイニングによって分析した結果、「子ども」「実習」「関わる」「方」「自分」といった語句の頻出度が高かった（図１）。具体的な対象学生たちの記述を確認すると、「子どもとの関わりだけではなく保育者と保護者の関わり、園の環境構成のこだわりなど知ることができた。」「子どもとコミュニケーションを取りながら部分実習を行うことができた。」「子どもに合わせた関わりや、子どもに物事をわかりやすく伝えるための工夫、楽しめる工夫を学ぶことができた。」「実習日誌の書き方と指導案の書き方が理解できた。」といった記述がみられた。

次に、教育実習を経験して、課題を感じた部分についても自由記述の内容をテキストマイニングによって分析した結果、「子ども」「しまう」「感じる」「自分」「考える」「課題」といった言葉の頻出度が高かった（図２）。具体的な記述としては、「子どもから見た自分の立ち位置や部屋の中の動線が環境作りとして大切だと学んだ」「保育者として子どもたちの喧嘩の対応や、遊びを発展させることを課題に感じた」「子どもたちに何かを説明する時にわかりやすい説明が出来なかったこと」「子どもの成長に繋がる設定保育ではなく、自分がしたい設定保育になってしまったように感じた」といった内容がみられた。

まず、ほとんどの対象学生たちは、実習前に子どもたちと関わる機会がなく教育実習が実質的には初めて子どもと関わる保育現場となっていた。その結果として、当然ながら「子ども」との関わりを経験できたことに成果を感じているとともに、成果として「方」と出てきているように子どもと関わる方法について意識を向けている様子が自由記述において見受けられる。また、対象学生たちが課題に感じている点に着目してみると、「自分」という言葉が頻出し、「自分の役目がわからない」「自分がしたい設定保育」などという文脈が確認された（図３）。こうした結果から、対象学生たちが実際に子どもと関わることで教育実習に行く前に受講した大学での講義を活かしながら具体的な子どもの姿を捉えようとしつつも、保育方法や保育者と

しての自分を主体として保育を振り返っている様子が見受けられる。

保育実践経験が乏しい初任保育者は、子どもへの対応方法のわからなさや多様な子どもを理解する難しさに困り感を感じやすく、保育実践の中で目の前の幼児の行為を幼児の立場から捉えることが困難であり、その場の状況を主観的印象や心象から推察しているといった特徴があることが報告されている（加藤・安藤，2013；佐藤・相良，2017）。また、小学校教師を対象とした梅村（2021）の研究では、若手教師が熟練教師と比較して、タイムマネジメントや場の設定といった授業者の視点から授業づくりを考える特徴があることを明らかにしている。こうした先行研究を踏まえると、初任保育者に近い本研究の対象学生たちは、教育実習を経験する中で子どもとの関わり方に対して意識的に取り組むことができていたことが推察される一方で、子ども視点から保育を考えるという点においては、具体的な表現ではないとしても課題として捉えていることが考えられる。



図1. 教育実習を経験して感じた成果



図2. 教育実習を経験して感じた課題

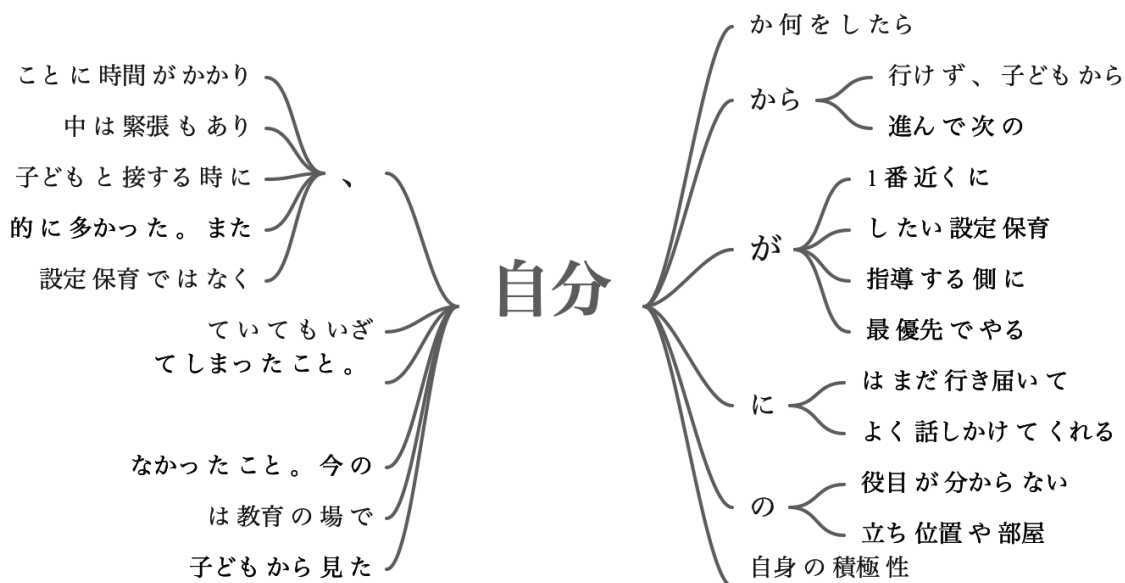


図3. 学生たちが感じていた課題（自分）

V. ま と め

本稿では、昨年度の「幼稚園教育実習における学生の現状と課題」の継続研究として、明らかにした5点の課題について、今年度から対面で実施した講義等で改善するとともに、教育実習生が実習後に記述した振り返りの内容を調査・分析し、教育実習での学習成果を高めるため、さらなる課題を明確にすることを目的とした。

講義では、人的資源を増員できたことや、より実践的な場面を想定させ活動する機会を多く取り入れることで、教育実習への期待を高め、不安を払しょくする学びとなったと考えている。

また、幼稚園教諭を目指す本学の学生が受講する「教育実習講義Ⅰ・Ⅱ」のみならず、保育者への学びに繋がる「保育内容演習」や「保育内容の理解と方法」等の他科目と連携を図り、課題達成を目指した活動を多く設定できたことも大きな成果である。

実習生たちの振り返りからは、子どもとの関わりをポジティブに経験している様子が見受けられ、積極的に子どもとの関わろうとした意識があったことが推察された。特に、子どもとの関わり方の点においては、教育実習に臨む前に講義の中で取り組んだ制作活動や絵本の読み聞かせ場面の設定などから、保育技術の向上を対象学生たちが感じていたことが窺える。

その一方で、対象学生たちの振り返りから、幼児視点から保育ができなかったことが浮き彫りになった。初任者ほどその傾向が強くなるという先行研究もあり、本研究調査からも実習時における学生の思考は、自分を主体者として保育しがちであることが顕著となった。指導者である我々には、「幼児の視点に立てる保育者」の育成が強く望まれる。

以上のことから、各講義ではこれからも経験を積みながら体得できるように工夫し、模擬保育や実践的な活動を多く取り入れていく。実践的な活動では実際の幼児の反応を想定した幼児役なども設定し、「保育者がしたい活動」から「幼児がしたくなる活動」を常に意識できるようにしていくことも必要である。また、これからも実習に関連する講義のみならず、他科目との連携を図り、演習時の重要な観点として、保育者の視点と同時に幼児の視点を考えるように教員間で共有し、実習に送り出す準備を整えていきたい。

謝 辞

本研究に関わる調査について、教育実習の実習指導の向上を目指し、実習生が教育実習においてより良い学びにつながるための考察を行うために、北海道内の多くの実習園の皆様のご協力をえて実施しえたものです。また、学生の皆さんは、今回の教育実習指導に関わる講義すべてにおいて、積極的な受講と取り組み、教育実習では今後の保育者を志すうえでの重要な学びに結びつけてくださいました。このような貴重なご協力により有意義な調査結果・分析結果を得ることができましたことに、記して心から感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 北翔大学・北翔大学短期大学部（2022）「教育実習の手引き」
- 文部科学省（2018）「幼稚園教育要領解説」フレーベル館
- 厚生労働省（2018）「保育所保育指針解説」フレーベル館
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館
- 菜原桂子・梅村拓未・石澤優子（2022）「幼稚園教育実習における学生の現状と課題」『北翔大学短期大学部研究紀要』第55号139頁
- 菜原桂子（2017）「幼稚園教育実習・保育所実習における指導案の現状と課題」『北翔大学短期大学部研究紀要』第60号81頁
- 加藤由美・安藤美華代（2013）新任保育者の抱える困難－語りの質的検討－，兵庫教育大学教育実践学論集，14，27－38.
- 佐藤有香・相良順子（2017）保育者の経験年数による「幼児理解」の視点の違い，日本家政学会誌，68（3），103－112.
- 梅村拓未・高瀬淳也・高橋正年・河本岳哉・村上雅之・中島寿宏（2021）小学校体育授業における熟練教師の指導技術に関する研究－授業計画に対する意識および児童とのかかわりに着目して－，北海道体育学研究，56：19－32.
- 北翔大学短期大学部（2022）「講義要綱」